

特集

最北・最古の国宝は、 遠軽にあり

海峡を越えた黒曜石の力

日本最北にあり、かつ最古の国宝が、遠軽町の白滝遺跡群出土品だ。
主に約3万年～1万5,000年前の旧石器時代の石器で、地元産出の黒曜石で作られている。
切れ味抜群の石器は、津軽海峡を越え、山形県などの旧石器時代の遺跡や、
世界文化遺産「北海道・北東北の縄文遺跡群」の三内丸山遺跡でも発見されている。
時空を超えた黒曜石を体感する旅に出よう。

天然ガラスの山

国宝といえば、法隆寺の「玉虫厨子」や五重塔のように、古の人々が精緻な技で作上げた美しい工芸品や、荘厳な建造物を思い浮かべる方が多いだろう。二〇二三年（令和五）、コロナ禍にあえぐ北海道に届いたビッグニュースは、そんな固定観念を覆した。遠軽町で出土した「北海道白滝遺跡群出土品」の石器類千九百六十五点が国宝に指定されたのだ。約三万年～一万五千年も前の古代人が黒曜石を割って作った石器である。旧石器時代の遺物として初めての国宝で、遠軽町は、日本最北・最古の国宝のまちとなった。

遠軽町教育委員会の学芸員、瀬下直人さんは「白滝出土品の特徴は、バリエーションが豊富なことです。日本最大級の黒曜石産地、赤石山があり、麓を流れる湧別川の河岸段丘では百カ所もの遺跡が発見され、旧石器時代を通じた遺物が揃っています」と言う。これら町内出土の埋蔵文化財が収蔵・展示されているのが、石北本線白滝駅か

（写真上）遠軽町埋蔵文化財センターの展示室。黒を基調にしたスタイリッシュな内装は美術館のようで、黒曜石の存在感を際立たせている。

文＝北室 かず子
写真＝田淵立幸



赤石山の黒曜石露頭。黒曜石は、粘りのある溶岩の先端が空気に触れて急冷されてできる。赤石山を訪ねるジオツアーも開催されている。



●遠軽町埋蔵文化財センター、遠軽町白滝ジオパーク交流センター／遠軽町白滝138-1(遠軽町役場白滝総合支所) ☎0158・48・2213。9:00～17:00(入館は16:30まで)、11月～4月／土日祝休館(ただし3月は無休。4月は未定)、5月～10月／無休、年末年始休館。一般320円、高校生以下160円。遠軽町白滝ジオパーク交流センターは入館無料。白滝駅から徒歩約15分。



黒曜石の生成過程を解く、遠軽町白滝ジオパーク交流センターの展示。

ら徒歩約十五分の遠軽町埋蔵文化財センターだ。槍の先端に着けた尖頭器、ナイフとして獲物の解体に使われた削器、骨や角を加工する際に使用した彫器、獲物の皮をなめすための搔器、そして動物の骨や角の軸の両側に複数枚を埋め込んで使われた小さな細石刃などが、

鋭い光を放って鎮座している。黒曜石はガラスを主成分とするマグマが急速に冷やされて固まった、天然のガラス。筆者はかつて瀬下さんに赤石山を案内していただいたことがある。林道からしてキラキラと黒く輝き、頂上は微量の鉄分によつて赤みを帯びた黒曜石で埋め尽くされていた。山全体が宝石に思えて圧倒されたものだった。

同じ建物内にある遠軽町白滝ジオパーク交流センターでは、黒曜石を生んだ約二百万年前の火山活動をはじめ白滝の地形や地質が学べる。ジオパークとは、自然遺産を守りながら研究・教育・観光

先人が残した文化財には等しく価値があると考え、瀬下さん。最近、岩や木を使って道具や建物を作る人気が。ゲームの影響で子どもたちの来館が増えているそう。ゲームの仮想体験をきっかけに本物の文化財に触れるサポートに尽力する。



に活かし、地域の活性化を図る取り組みだ。白滝は二〇一〇年(平成二十二)に認定されている。

接合資料が語ること

白滝には長い研究の歴史がある。大正時代から黙々と石器調査をし、出土品を展示する私設博物館まで設けたのが在野の研究者、遠間栄治だ。一九五四年(昭和二十九)、台風の被害状況調査にあたった営林署作業員から風倒木の下で三十センチ超の巨大な石器発見の報を受けるや、遠間は汽車と徒歩で頻繁に現地に通って収集した。この遺跡は幌加沢遺跡遠間地点と名付けら

【特集】 最北・最古の国宝は、遠軽にあり

れた。遠軽町埋蔵文化財センター内にある遠間栄治記念室は、研究の扉を開いた遠間への敬意に満ちた空間となっている。さらに、考古学者の吉崎昌一よしざき まさかずは一九五三年（昭和二十八）から白滝村を調査し、北海道大学とミシガン大学の合同調査も行われ、白滝団体研究会が結成されて地質学、考古学など多彩な分野の人が集った。遠間栄治による収集品は北海道指定有形文化財になった。一九八七年には木村英明きむら ひろあきら札幌大学文化交流特別研究所（後に埋蔵文化財展示室）が遠間地点でロシア科学アカデミーとの共同調



遠間栄治記念室。遠軽郷土資料室で使われていた展示ケースを再利用したことでクラシックな雰囲気が醸し出されている。



圧力をかける押圧剥離によって黒曜石が連続的に剥がされ、細石刃を効率的に作る技法も旧石器人は開発していた。遠軽町埋蔵文化財センターにて

遠軽町埋蔵文化財センターに収蔵されている国宝の一部。写真提供＝遠軽町教育委員会



査を行い、物流ネットワークの提示など大きな成果を上げた。そして一九九五年（平成七）から二〇一〇年（平成二二）（公財）北海道埋蔵文化財センターの発掘調査が行われた。この調査では約六百六十九万点、重量約十三トもの遺物が出土し、整理だけで延べ七万七千人以上が従事する大規模なものだった。火を焚いた痕跡や石器が集中する多数のブロックが発見され、河岸段丘上に営まれた石器作りのムラの様子が次々に解明されていった。調査と報告書執筆に携わった（公財）北海道埋蔵文化財センター理事長の長沼孝ながぬま たかひささんは、白滝の遺跡の意義をこう語る。「日本の歴史は縄文時代より



白滝遺跡群の調査を、旧石器時代についての世界でも類のない大規模調査だと振り返る長沼さん。1万4,000ページを超える報告書の作成にも携わった。



国宝の尖頭器とその図解。どの方向から力を加えて形を整えたか、熟練の目で観察し、図解することで真実が見えてくる。写真提供＝北海道立埋蔵文化財センター



さらに前の旧石器時代から始まるので、その旧石器時代の国宝が誕生したことは極めて重要です。考古学としての学術的価値は、何がどういう状態で出てきたか、客観的な記録があることが

不可欠です。そして国宝となった石器類千九百六十五点のうち、接合資料が四百五十一点あることにも注目してください」と言う。

作りが行われたことの証拠でもある。その何百万点という剥片から、色、文様、凸凹の合うものを探し出す途方もなく複雑なパズルだ。

接合資料とは、出土したバラバラのかけらを組み合わせてもとの形を作り上げたものだ。白滝遺跡群には完成品よりも壊れた石器や剥片、削り屑が多い。盛んに石器

瀬下さんはその難しさを「異なる十種類のジグソーパズルのピースをこちゃ混ぜにしたものから、パズルを作り上げるような感じです」と表現する。探す範囲は一辺四方

遠軽町埋蔵文化財センターでは、予約なしで石器づくりなどの体験学習ができる。専門スタッフが指導してくれるとのこと、筆者も尖頭器作りに挑戦してみた。この

驚異の切れ味

くらいかと思いきや、沢を隔てて三百四十メートル離れたところの石器がびつたりくっついたものもあるという。長沼さんいわく「接合資料で特に象徴的なのは中抜けのものです。私は鯛焼きに例えて、中のあるこ（完成した石器）はどこかへ持ち出され、皮だけが残っている状態と説明しています。接合資料からは、石器製作の手順や作り手の動作はもちろん、石器を作った人の考え方、集団の関係まで、つまり人が見えてくるのです」。



①

①左側の塊が右側の塊の上に覆いかぶさるように接合する。白い部分は、持ち出された尖頭器をプラスチック樹脂で復元したもの。写真提供＝遠軽町教育委員会 ②黒色に茶色が混じる黒曜石原石を利用したことがわかる、迫力ある大型の接合資料。遠軽町埋蔵文化財センター所蔵



日は、長年の研究を通して日本屈指の石器作り名人との称号がある瀬下さんの担当だ。体験用の板状の原石に丸い河原石を打ちつけて粗加工し、次にエゾシカの角で外縁部を叩く。「ここ」「はい、次はここ」と、爪先を立ててミリ単位で指示されるポイントを無心で叩いていくと、やがて長方形の原石から尖頭器の形ができ上がった。獲物と戦う道具を作る古代人の真剣さには及びもつかないが、同じ動作をしたことで三万年の時空をワープして彼らとつながったよう

石器作り体験を指導してくれた瀬下さん。広々とした体験室では、取材時も土器作りや石器作りに熱中する家族連れの姿があった。他にもエゾシカの角からペーパーナイフや釣り針を作ったり、滑石から勾玉（まがたま）を作るなど、多彩なメニューが魅力だ。



瀬下さんに指示される通り、恐る恐る外縁部を叩くと、尖頭器の形ができ上がった。破片は鋭く、ガラス屑そのもの。

な不思議な気持ちになった。『石器づくりで何がわかるか』（長井謙治著、吉川弘文館）によると、古代の人が使った素材や技術を用いて、道具を作ったり使ったりする感覚・経験を通して探究する学問分野を実験考古学というそうだ。現代人が石器を作った際の脳機能画像の解析も行われているらしい。ワープした感覚はあながち筆者の妄想ではなく、遙かな先祖と脳の深層が響き合ったのかもしれない。シベリアの永久凍土から出土し

たマンモスの死骸は、黒曜石の細石刃が分厚い皮膚を裂き、椎骨にまで達していたという。石を割っただけの道具に本当にそんな威力があるのだろうか。許可をいただいて肉を持参し、自作の尖頭器で切ってみた。なんと、わが家の包丁より爽快な切れ味。とはいえ、尖頭器本来の用途は槍の穂先なので、瀬下さんが削器を作ってくれた。驚くべきことに肉にそつと当てただけで、刃先がすうっと肉の繊維に入り込んでいく。これなら完熟トマトでもつぶす

刃が肉にすつと入り、筋もスバツと切れる威力に驚嘆。古代人にとって黒曜石がいかに価値の大きいものだったか実感できた。



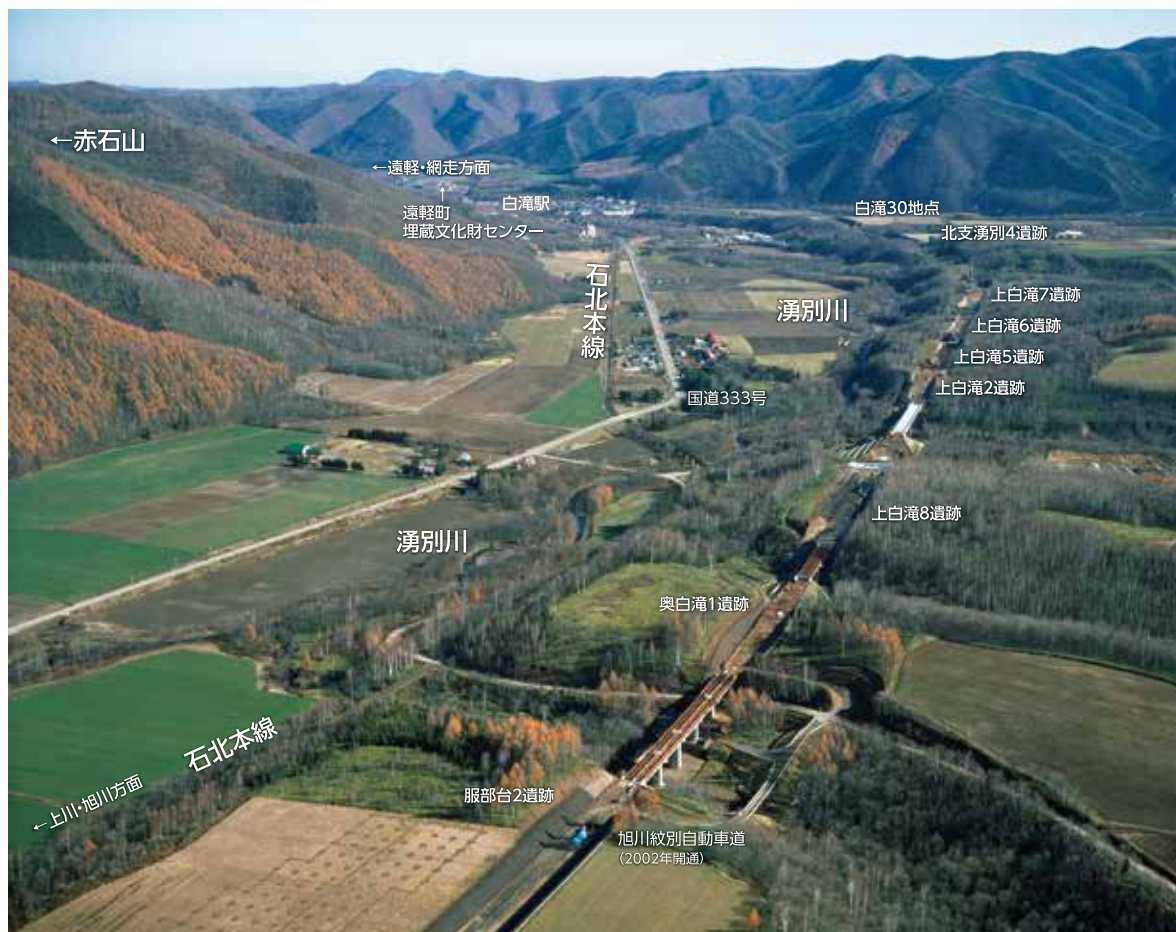
【特集】最北・最古の国宝は、遠軽にあり



津軽海峡を越えた白滝産黒曜石。縄文時代にも使われ続けた。

ことなく薄く切れるに違いない。黒曜石の力を目の当たりにすると、伝播の広がりも納得できる。白滝産黒曜石の石器は、氷期で海面が下がり陸続きだった宗谷海峡を越え、旧石器時代のうちにサハリンへ伝わった。一方、津軽海峡は陸続きにならなかったにもかかわらず、山形県の小国町湯の花遺跡や大石田町角二山遺跡（約一万八千年～約一万六千年前）でも発見されている。なぜ白滝産とわかるのだろうか。それは、黒曜石のほとんどなる溶岩の組成が地域によって異なるため、蛍光エックス線で元素の構成比率を分析することで産地の特定ができるからだ。黒曜石は縄文時代に入っても重用され、三内丸山遺跡（約五千九百年～約四千二百年前）をはじめとする世界文化

遺産「北海道と北東北の縄文遺跡群」からも白滝産の石器が出土している。旭川と網走を結ぶ石北本線は、旧石器時代の秘宝を生んだ自然景観の中を疾走する。旭川駅から網走駅に向かう方向の場合、上川駅を過ぎて山岳地帯に分け入り、北海道の屋根・大雪山を石北トンネルで抜けた後、景色の陰しさが和らぎ、なだらかな山稜が見えるほどに両側が開けたところが、白滝だ。この山稜が黒曜石の大産地・赤石山と百カ所もの遺跡群を抱えている。そして古代人は想像もしなかったであろうけれども、津軽海峡は海底トンネルで結ばれ、北海道新幹線で行く新青森駅は三内丸山遺跡の目と鼻の先だ。そんな現地で石器を見たり作ったりすることで、古代の人々と私たちの間に新しい回路が開かれるかもしれない。①



石北本線が旭川から網走へ向かう際に、オホーツクエリアの入り口に位置するのが白滝だ。左に膨大な黒曜石を抱く赤石山がそびえ、右には赤石山の黒曜石を利用した人々が生きた証である遺跡群が連なる。湧別川の河岸段丘上に建設された旭川紋別自動車道のルートには多くの遺跡が眠っていた。写真提供＝北海道立埋蔵文化財センター